

---

# ダーウィン・ノート

キプロス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ダーウィン・ノート

### 【Nコード】

N1474L

### 【作者名】

キプロス

### 【あらすじ】

大学卒業祝いにイギリス旅行に行くことにした啓二。到着するとともにロンドン観光を満喫する啓二だが、宿泊先のホテルで殺人事件に遭遇する。そこから啓二は巨大な陰謀の渦に巻き込まれていってしまう……。ダーウィンの遺した謎の文書『ミッシング・ノート』を巡る戦慄のサスペンスストーリー。ロンドンの実在建造物も登場していきます。

## 変化（前書き）

新たな小説を書く事になりましたキプロスです。

この作品は『ダ・ヴィンチ・コード』といった小説を意識して書いており、ダーウィンに関わる謎が主核となっています。

情報としては不確かな点も多く、フィクション要素がかなり多いのであまり期待しないで下さい。

## 変化

『最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるでもない。唯一生き残るのは、変化できる者である。』  
チャールズ・ダーウィン

ダーウィンの言っている事は正しい。

私はこれまで、目の前に広がる移り行く光景を見ていなかった。

時代は、彼のような人間によって動いていくのだ。

彼は『進化論』を提唱し、古い思想を持つ人間達によって大きな批判を受けた。

だが、今の時代は彼の考えを受け入れている。

科学と宗教間の戦争は科学の勝利に終わり、科学が蔓延する世が生まれた。

ダーウィンの知識は、今日の科学の基盤となっている訳だ。

私はそんな古い思想を持つ人間だった。

だが、今でもそうだ。

新しい思想を持って、古き思想を頑強な物とする。

“ ミッシング・ノート ”

ダーウィンが遺した人類に対する“遺産”

それを我が手に掴んだ時、何が変わるだろうか？

科学の崩壊。

それさえありえるかも知れないな……。

## 変化（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

## 英国到着

ロンドン上空。

ボーイング737の窓から、啓二は外を見つめていた。薄らに見える街の輪郭。霧がかったロンドンの街は空から照りつける朝日を遮っている。

唯一見えたのは、ビッグ・ベンだけだった。

啓二は、座席右側に手を伸ばし、湯気の立つコーヒーを口に入れる。舌にコーヒーの温かな熱触が徐々に浸透していく。

後ろから、エンジンの鈍いうなり声が響き渡る。

啓二はついにロンドンへと到着するという実感に笑みを浮かべた。以前から憧れの場所だったロンドンが、ついにこの目で拝めるのか……。  
そんな淡い期待と喜びを胸に持つ啓二を乗せたボーイング737は着陸態勢を取り始めていた。

轟きと鈍い衝撃を上げて、ボーイング737は滑走路に着陸する。激しい衝撃もどこへやら。啓二は眼前に映るイングランドの大地に魅了されていた。

ターミナル3とボーイング737の搭乗口を繋ぐ連結装置が鈍い衝

撃音を上げ、ボーディング・ブリッジが繋がる。

静かなエンジン音が響く中、乗客達は席から立ち上がり、上の荷物入れからバッグを取り出していく。

啓二も席から腰を上げ、黒色のショルダーバッグを取り出し、それを右肩に掛けた。

添乗員の女性は微笑みながら啓二ら乗客をイギリスへと送り出した。

ロンドン・ヒースロー国際空港。

イギリス最大の空港であり、世界でも名の知れた場所である。

人混みの出来上がったターミナルを、啓二は歩きながら見物している。

以前にテロ未遂事件があったからか警備員の姿がやけに多く、ゴールデン・ウィークということもあってか、日本人の姿がよく目立っていた。

ふと、啓二は一つのベルトコンベアーに立ち止まり、搬出口を注意深く見守る。

すると、ベルトコンベアーから茶のキャリーバッグが横倒しになって流れてきた。

「これだな……」

啓二は迷わずキャリーバッグを左腕で掴み、ベルトコンベアーから取り出す。

その後、何事も無く啓二はヒースロー国際空港を後にした。

タクシー運転手のマイケルは、空港前の道路でどこまでも続くタクシーの行列に混じっていた。

行列を作るタクシーは、気品溢れるロンドンタクシー（ブラックキヤブ）から、先進的なハイブリッド車まで多種多様だ。

マイケルが煙草を吸って一服していると、右横の窓から鈍い衝撃音が響く。

煙草の吸殻を満杯の灰入れに押し込み、マイケルは慌てて右を見た。

窓には、黒髪の若いアジア系男性が映り込んでいた。

茶色のセーターに白いTシャツ。そして藍色のジーンズという格好をしている。

左手に握る大きなキャリーバッグと右肩の黒いショルダーバッグを見た所、観光客であることがマイケルには分かった。

「乗せて欲しい……」

その若い男は少しぎこちない口調の英語で言った。

マイケルは最初の客ということもあり、快く承諾し、彼の持つ二つのバッグを後ろのトランクに詰め込んだ。

若い男は後ろへと座り、マイケルはハンドルを両手で握った。

「で？どこに？」

マイケルは後ろに顔を向けて言った。

若い男はぎこちない様子で一枚の紙を手に取り、それを見つめる。

「…ビッグ・ベンを見れるルートでル・メリディアン・ピカデリーへ」

「了解。ビッグ・ベンね」

マイケルはハンドルを左に切り、緩くアクセルを踏み込む。

行列の中にあつたマイケルのロンドンタクシーは、ゆっくりと行列を抜けた。

**英国到着（後書き）**

ご意見・ご感想等お待ちしております。

## ビッグ・ベン

流々と清らかな水が流れていくテムズ川。

その湖畔には、イギリスの名所、ウエストミンスター宮殿が聳えている。

その昔、ウエストミンスター宮殿は今のよう観光地やイギリスの国会議事堂としてではなく、王の宮殿として使われてきた。

1834年、火災で大半が焼失し、その後新たに再建された。

再建後も度重なる衝撃の中にさらされており、第二次大戦時にはドイツ軍の爆撃で庶民院を破壊されている。

現在は観光地として有名であるが、過去には戦略上の要所として栄えていたのだ。

霧がかかるロンドンの街を啓二を乗せたロンドンタクシーが通り抜ける。

啓二の眼前には、あのウエストミンスター宮殿が広がっていた。

薄らな霧で宮殿の輪郭が強調され、美しいシルエットが啓二の瞳に映りこんでいた。

マイケルはラジオを掛け、ロックを聴いていた。

啓二は僅かながら聴こえて来るその軽快な音楽を耳で受け止め、由緒正しきウエストミンスター宮殿を見つめる。

その滑稽さを実感した啓二は、思わず苦笑いした。

タクシーはゆっくりと左へ曲がる。  
すると、ついに啓二のお目当ての建造物が見え始めてきた。

「…ビッグ・ベン」

ウエストミンスター宮殿の横に聳える巨大な時計塔。  
それがビッグ・ベンだ。

ビッグ・ベンは愛称として知られており、その高さは96・3mにも及ぶ。

内部には、巨大な鐘が入っており、正午になるとその鐘が奏でられるのだ。

その鐘の音は、日本における学校のチャイムメロディーの元になったとも言われている。

啓二の目は光り輝いていた。

今まで写真や映画でしか見た事の無かったビッグ・ベンをついにこの目で見れたからだ。

その光景は、写真よりも遥かに素晴らしかった。

「到着！」

マイケルはゆっくりと歩道へと車体を寄せていく。

その左手には、豪華絢爛な雰囲気振りまく建物が聳えていた。

ロンドン・ウエストエンドの中心部。ピカデリー通りとリージェン  
ト通りの間に位置するホテル。

それが、ル・メリディアン・ピカデリーである。

かの有名なピカデリーサーカスといった観光地に近く、伝統のある  
高級ホテルだ。

「ありがとう」

啓二はチップを含めてドル紙幣を手渡し、ドアを勢いよく開けた。

マイケルも同時にタクシーから降り、後ろのバッグを下ろすの手  
伝った。

「ここで待っていてくれるかな？荷物を下ろしてから観光に行きたい  
からね」

「了解、ここで待機しておくよ」

マイケルは笑顔で啓二を見送り、タクシーの運転席に戻る。

車内のラジオからは、未だにロックが流れていた。

おもむろにポケットから箱を取り出し、口に煙草を一本口付けする。

そして、静かにライターで火を付けた。

## ビッケ・ペン（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

## 銃声

扉を開けると、そこに古き伝統のこもったエントランスが広がる。ル・メリディアン・ピカデリーはロンドンでも歴史のあるホテルなのだ。

啓二は黒のシヨルダーバッグを右肩に掛け、左手でキャリアバッグを引きずっていく。

「いらっしゃいませ。ル・メリディアン・ピカデリーへようこそ」

フロアマナージャーのフィリップは、ロビーの受付に立ち、笑顔で啓二を迎える。

この時期には日本人が多いな。  
フィリップはそんな事を心の中でつぶやいた。

「予約した岳島だけど……」

啓二は不安げな様子でフィリップを見つめる。

フィリップは、カウンターに置いてあったノートパソコンを使い、予約名簿を確認する。

パソコン画面は下へ下へと流れていき、多くの人の名前が映りこむ。その中には、敬二の名前も入っていた。  
フィリップはパソコン画面から目を離し、啓二の顔を見据える。

「岳島様…ですね。シングルルームにご滞在を？」

「ええ。1人旅行でね」

啓二は含み笑いをしながら言った。

「ベルボーイに付いて行って下さい。これがルームキーです」

フィリップは右腕を啓二の前に伸ばした。

啓二の右側には、ベルボーイが愛想良い表情で待機していた。

生物学者、フィルマン・アルトーはある用事で、ル・メリディアン・ピカデリーに滞在していた。

アルトーはパリにあるパスツール研究所で働いている。

高級感溢れる机に黒色のクリアファイルとA4の白い紙を置き、その紙にボールペンで何かを書いていた。

その刹那。何かが砕け散る激しい衝撃音が響く。

アルトーが後ろを振り返ると、壊れて開ききったドアと、黒装束を纏った謎の男が立っていた。

「何だお前は!？」

アルトーは叫んだ。

「……心配するな。“ミッシング・ノート”のヒントを貰いに来ただけだ」

黒装束の男は、アルトーに歩み寄りながら言った。  
男の声はこの世のものとは思えない程不気味で、アルトーは寒気を覚えた。

アルトーは椅子から立ち上がり、黒装束の男を見据える。

「残念だがそれは出来ない」

アルトーは不気味な感触を覚えながら言った。

何故この男がああ文書の事を知っているのかという疑念。

それを解き明かす術は、奴を拘束し、警察に突き出して尋問させるしかなかった。

「お前は後悔する……」

黒装束の男は低い声でそう言うと、右手をアルトーの額へ突き伸ばす。

男の手には、デザートイーグルが握られていた。

チャンスは今しかない……。

そう考えたアルトーは、思い切って黒装束の男にタックルを仕掛けた。

黒装束の男は突然の事に戸惑い、一瞬動きが止まる。

「クッ……離せ！」

「離す訳にはいかない……」

アルトーは男の右手を両腕で握り締め、上へと向けた。

黒装束の男は焦り、思わず銃の引き金を引いてしまった。

鈍い銃撃音……。

そして、床に落ちる一発の薬莖。

デザートイーグルから放たれた銃弾は、部屋の天井に一つの穴を開けた。

アルトーはとつさに男の右腕から手を離し、怒りの鉄拳を男の右頬に喰らわせる。

黒装束の男はたじろぎ、その体勢が崩れてしまう。

右手に握られていたデザートイーグルは部屋の入り口近くに吹っ飛んだ。

やれる！これなら何とかなるはずだ。

アルトーは希望を胸のうちに秘め、さらなる攻撃を喰らわせようとした。

「…調子に乗るな」

黒装束の男は、胸倉辺りから何かを取り出す。

その刹那、アルトーの首には切り傷が生まれ、噴水の如く鮮血が流れていった。

アルトーは床へ派手に倒れ込む。

「うう………何………？」

息が出来ず、アルトーの口からは赤い泡のみが噴き出す。

はつきりしない視線の先には、赤く染まったナイフを握る黒装束の男が映っていた。

黒装束の男は倒れ込むアルトーの横で、机に置かれた黒いファイルケースを手に取り、笑みを浮かべながら見入っている。

駄目だ……それを取るな……。

アルトーはパクパクと唇を動かしたが、男の耳には聞こえていない。朦朧とする意識の中、なんとか起き上がろうとした。

「何をしてる！？手を上げろ！」

アルトーの耳に響く聞いた事の無い男の声。

声の聞こえる元へと目をやると、そこには1人の若い男がデザートイーグルを構えて立っていた。

ベルボーイに先導され、啓二は自身の部屋へと向かっていた。

「こちらになります」

「ありがとうございます。ここでいいよ」

啓二はバッグを受け取り、チップを手渡した。

鍵を開けると、豪華絢爛な光景が啓二の目に映りこむ。

啓二はバッグをベッドの近くに置くと、部屋の窓に歩み寄る。

啓二の眼前には、美しいロンドンの街並みと、ビッグ・ベンが目に映った。

思わず啓二はその光景に心を奪われ、しばらくの間見つめていた。

すると、突然銃声のようなものが響き渡った。

自分の世界に入っていた啓二は、思わず現実に引き戻される。

頭の中は錯乱し、啓二は音源を探ろうと部屋を飛び出した。

周りにいた宿泊客が慌てた様子で逃げる中、啓二は興味の誘惑に勝てず、その音源へと向かう。

すると、ある部屋のドアが開き、そこから悲鳴が聞こえてくる。

啓二が開いたドアを覗くと、首から血を出して倒れる男と黒装束を纏った男がいた。

開いたドアの前には、銀色に光る銃が落ちていた。

これはやるしかない……。

啓二は瞬時にデザートイーグルを掴み取り、それを黒装束の男に構えた。

「何してる！？手を上げる！」

とんだ来訪客だな……。計算違いだ。

黒装束の男は渋い顔でファイルを机に置くと、手を上げた。

その刹那、部屋の壁が爆発した。

上げられた男の手には、黒い長方形の物体が握られていた。その中心には、白色のスイッチが付けられている。

「……アルトー。君の“ダーウィン・ノート”は全部見させて貰ったよ」

黒装束の男は冷徹な瞳で死に行くアルトーを見据えて言った。そして、男は素早く崩壊した壁から外へと飛び出す。

ここは3階のはずだぞ!?

啓二が慌てて崩壊した壁の穴から下を見ると、ゴミ袋を荷台へ山積みに乗せた巨大なトラックが停車し、黒装束の男はその荷台のゴミの上にいる。

「…なんて奴だ……」

啓二は呆然としながら下を見ていたが、今起こっている現状の本質を思い出した。

後ろを振り返り、啓二は床に倒れるアルトーの元へ向かう。

アルトーの首からはさらに血が流れ、床一面が血の海になっていた。

「大丈夫ですか？」

「黒いファイルを取れ……」

アルトーは机に置かれた黒いファイルを指さした。

紙の一部は爆発の衝撃で床に落ちている。

「どうすればいいんですか？」

啓二はそのファイルをアルト一の眼前に差し出す。

「……………それだ……………一番の紙」

朦朧とする意識と、喉の激痛に耐え、アルト一は何とか伝えた。  
啓二は慌ててファイルの一番の紙を見た。

『ダーウィン・ノート p.1』

ミッシング・ノートへのポイント1

O P A  
Q B  
R C  
S D  
T E  
U F  
V G  
W H  
X I  
Y J  
Z K  
L  
M  
N

G T F S E R D Q C P B O A  
G U F T E S D R C Q B P A  
H V G U F T E S D R C Q B  
I W H V G U F T E S D R C  
J X I W H V G U F T E S D  
K W J X I W H V G U F T E  
L Z K Y J X I W H V G U F  
M A L Z K Y J X I W H V G  
N B M A L Z K Y J X I W H  
O C N B M A L Z K Y J X I  
P D O C N B M A L Z K Y J  
Q E P D O C N B M A L Z K  
R Q P O N M L  
S R Q P O N M  
T S R Q P O N

V	I	U	H	T	G	S	F	R	E	Q	D	P	C	O	B	N	A	M	Z	L	Y	K	X	J		I	V	H	U
V	J	U	I	T	H	S	G	R	F	Q	E	P	D	O	C	N	B	M	A	L	Z	K	Y	J	W		W	H	V
W	K	V	J	U	I	T	H	S	G	R	F	Q	E	P	D	O	C	N	B	M	A	L	Z	K	X	I	X	I	W
X	L	W	K	V	J	U	I	T	H	S	G	R	F	Q	E	P	D	O	C	N	B	M	A	L	Y	J	Y	J	X
Y	M	X	L	W	K	V	J	U	I	T	H	S	G	R	F	Q	E	P	D	O	C	N	B	M	Z	K	Z	K	Y
Z	N	Y	M	X	L	W	K	V	J	U	I	T	H	S	G	R	F	Q	E	P	D	O	C	N	A	L	A	L	Z
A	O	Z	N	Y	M	X	L	W	K	V	J	U	I	T	H	S	G	R	F	Q	E	P	D	O	B	M	B	M	A
B	P	A	O	Z	N	Y	M	X	L	W	K	V	J	U	I	T	H	S	G	R	F	Q	E	P	C	N	C	N	B
C	Q	B	P	A	O	Z	N	Y	M	X	L	W	K	V	J	U	I	T	H	S	G	R	F	Q	D	O	D	O	C
D	R	C	Q	B	P	A	O	Z	N	Y	M	X	L	W	K	V	J	U	I	T	H	S	G	R	E	P	E	P	D
E	S	D	R	C	Q	B	P	A	O	Z	N	Y	M	X	L	W	K	V	J	U	I	T	H	S	F	Q	F	Q	E
F	T	E	S	D	R	C	Q	B	P	A	O	Z	N	Y	M	X	L	W	K	V	J	U	I	T	G	R	G	R	F
G		F		E		D		C		B		A		Z		Y		X		W		V	U	H	S		S		
H		J		F		E		D		C		B		A		Z		Y		X		W	V	T			T		
I		H		G		F		E		D		C		B		A		Z		Y		X	W	U	V		U		



## 銃声（後書き）

終盤辺りに書いた英語群ですが、AとAといった単語の所の横に入っている は区切り線です。

ご意見・ご感想お待ちしております。

## 暗号解説

目の前に横たわる男性の死体。

格調高い絨毯を染める真紅の血液。

そして、彼の示した黒のクリアファイルを持つ啓二。

それは果たして偶然なのか？

神の思召しか運命か？

それとも……何かの悪戯か。

啓二は悪寒を覚え、身震いする。

眼前に広がる光景を未だに信じられなかった。

崩壊した壁からは、美しいロンドンの情景。そして逃げ惑う人々の姿が見えた。

全てを伝えなくては……。

啓二はそう考え、部屋を後にした。

運転手マイケルは未だタクシーで待っていた。

まさか、自分のいるホテルの裏側で爆発が起こることは夢にも思わず、軽快なパンクロックを聴いていた。

「…開けて！」

右側の窓から響く振動と音。

右を見ると、慌てた様子で窓を叩く客、啓二の姿があった。

マイケルはラジオを切り、ドアを開ける。

「どうしたんです？」

「警察署に行ってください！」

乱れた声で啓二は言った。

マイケルは疑問を覚え、後ろに慌てて座る啓二の姿を見た。

左手に抱える黒いクリアファイル。

『ダーウィン・ノート』と書かれたそのファイルは、窓から入ってくる太陽の光を遮った。

右手には、謎の英語群が書かれた紙を持っている。

マイケルはその英語群を見た瞬間、あるものが脳裏に浮かんだ。

「それ……“ ヴィジュネル暗号 ”ですよね」

突然運転手マイケルの口から発せられた単語。

それは、啓二が聞いた事の無いものだった。

「何？その…えつと…」

「ヴィジュネル暗号ですよ。15世紀後半から16世紀までに考え出された暗号です」

ヴィジュネル暗号は、フランスの外交官ブレース・ド・ヴィジュネルによって考案された多表式の換字式暗号のことである。通称『ヴィジュネル方陣』と呼ばれるアルファベット式（前話終盤に登場した英語群）を用いて暗号化され、元の文を『鍵』と『暗号』にするのだ。

「これはね、ヴィジュネル方陣の最上段と左段の交わりで暗号を作るんです。

例えば答えの文が“DOG”だったらまず鍵となる言葉を作る。答えの文と交わるような言葉をね。

例えばとして鍵を“fox”にするとするならば平文の頭文字を最上段（D）鍵の頭文字を左段（f）に方陣の中に当てはめ、その二つの単語が交わる『I』が暗号文となる訳で、答えの文を交換した暗号は『ICD』となるんですよ」

啓二はなんともさっぱりな様子でマイケルの説明を聞いていた。よく分からない……という事を心の中につぶやいた。

「これは数式で当てはめれば解けない事は無いですよ」

「出来るのか？」

「ええ……なんとかやって見ます」

マイケルはそのヴィジュネル暗号の方陣と暗号の載った紙を受け取り、ペンを取り出す。

そして、見た事の無い数式を書き、計算していった。

暗号：m z i c i o c f j l s i s x m e i v k w z j b n  
e r d i m o o j i x  
鍵     : a b i l i t y a c h o i c e t h e o r y r e  
t r e a t a c h a n g e

「鍵だ！」

マイケルが書いた鍵の単語は左から「能力」「選択」「理論」「後退」「進化」の意味を持っている。

さらにマイケルは、その鍵をヴィジュネル方陣に当てはめていく。例えば a b i l i t y の頭文字 a を左段の A に重ね、右横に沿って暗号文 M に辿り着いたらその上の文字を見る。それが、答え（この場合は M）なのだ。

「答えは……MYARAVETHAEASTHENTYIFIW  
ARKIKNOWIT……」  
「区切ればMyarave.theeast.theenty.if  
wark.iknowit……」

啓二は頭をフル回転させ、英文を日本語に変えた。

……そういうことか。

「我が墓。東。20。歩けば。知る。……」

マイケルは訳が分からない様子だが、啓二は既に何かに気付いているようだった。

「…これは“ダーウィン・ノート”…我が墓という事は…ウエスト  
ミンスター寺院だよ」

「そうか……確かにウエストミンスターにはダーウィンの墓がある」

既に2人の脳裏には警察署という単語は無く。ウエストミンスター  
寺院一色となっていた。

マイケルはアクセルを踏み込み、タクシーは轟きを上げた。

## 暗号解説（後書き）

作中で登場するヴィジユネル暗号は実際に存在しており、それを基に暗号を作っております。

ご意見・ご感想お待ちしております。

## ダーウィンの墓

美しい芝と新緑の草木に包まれた大地。

そして、そこに悠然と聳えるのがウエストミンスター寺院である。

イギリス国教会の教会であるウエストミンスター寺院。

寺院は11世紀エドワード懺悔王により建設。中世のゴシック建築で作られている。

白色の美しい外観と、その長き歴史は多くの人々を魅了し、ユネスコ世界遺産に登録されている。

「……ダーウィンの墓は確か……」

啓二とマイケルは、寺院の中を彷徨っていた。

内部に広がる豪華なゴシック建築仕様を見て、啓二は深い歴史を感じた。

「ここだ！」

啓二は眼下にある黒いタイルを指さした。

それが、あのチャールズ・ダーウィンの墓だ。

このウエストミンスター寺院には、哲学者アイザック・ニュートンや蒸気機関車で有名なロバート・スチーブンソンの墓がある。

寺院には、イギリスで功績を上げた人々が床に埋葬され、深い眠りについているのだ。

多くの観光客は、このウエストミンスター寺院にある偉人達の墓を

踏みつけていく。

日本では無礼だと思われるこの行為も、イギリスでは問題ないという。

啓二とマイケルの眼前には、ダーウィンの眠る床の墓が映り込む。2人とも渋い表情で周りを見渡し、思い耽った。果たしてダーウィンの墓には何が隠されているのか？

啓二はダーウィンの墓の上に立ち、東がどこか探そうと近くを通りかかる体格の良い中年男性に声を掛けた。

「失礼、東はどっちですかね？」

「はい？そうですなえ…確か…あつちですよ」

中年男性は右人差し指で啓二から見て左に指さした。

「どうもありがとうございます」

啓二は礼を言い、歩幅を確かめながら東へと向かって歩き始めた。

「…駄目だ。何も無い」

ウェストミンスター寺院の壁や床を探した啓二だが、何も発見出来ずにいた。

本当に方角はあの男の言った通りなのかという疑念を考え始めていた。

「どうします?」

マイケルは渋い顔で啓二を見据える。

そもそも、この客の為に何をやっているんだろうか……最初は興味本意だったのに……。

そんな疑問がマイケルの脳裏を過ぎった。

「……何かおかしい」

啓二は思い耽り、ダーウインの墓に目を見据えた。

そもそも、この暗号が正しいとは啓二は最初理解出来なかった。

ダーウインは教会を嫌い、信仰心は地に落ちる所かその遙か地底に沈みきっていた。

そんなダーウインがこのウエストミンスター寺院に埋葬されているのは友人の科学者や聖職者達による働きかけによる結果だったはずだ。

啓二は今までに学んだ歴史についての記憶を探り、全てに疑念を抱く。

そして、間違っている所を探した。

なるほど……そうなのか……。

歴史を学んだ啓二は、ついに問題点を見つけ、この暗号の答えを見出した。

「……」じゃない……」

啓二から突然発せられた言葉。

それを聞いたマイケルの頭は混乱した。  
ならどこなんだ!?

「“ダウン”だ……」

マイケルはその言葉を聞き、ついに本当の“ダーウィンの墓”が分かった。

## ダーウィンの墓（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

## 動き出す国家

スコットランドヤード特殊部門（SO19）の職員アングス・マクベリーは携帯電話を手に取り、眼前で床を調べる2人の男を見つめていた。

非番だったアングスは、今日ウエストミンスター寺院に来ている。彼は寺院内部の厳かな雰囲気と、その美しい建式が好きで、暇があれば寺院を見に来ていた。

今日もまた、アングスはウエストミンスター寺院に来ていたが、いつもと少し違っていた。

若い男が突然東の方角を自分に尋ね、寺院の床を見たり叩いたりしている。

なんともおかしいな……。

アングスは何か嫌な予感がした。もしかしたら奴等はテロリストじゃないのだろうか？

気付けば、右手には携帯が握られ、ある所の番号を入力していた。

\*

『こちらスコットランドヤード特殊部門です』

アングスの携帯電話から男性の音が響く。

同僚の声だ。

『クレイグ聞こえるか？アンガスだ』

不意を突いて響く同僚アンガスの声。

今日は非番のはずだが……。と胸の内に思った。

『アンガス？どうしたんだ？』

『不審な男2人組がいる。“情報局保安部”と繋いでくれ』

『分かった……待ってる』

クレイブは受話器をデスクの上に置き、慌てて内線から別の場所に接続した。

『……副局長のチャイルズです』

アンガスは一瞬体が凍り付いた。

まさかあの“イギリス情報局保安部の英雄”が相手とは思っても見なかった。

イギリス情報局保安部。略称“SS”

一般には“MI5”という名称で知られる事が多い。

英国国内における治安維持活動を中心に行っており、世間でよく知られる“MI6”は国外の諜報活動が中心である。

その情報局保安部の副局長がチャイルズ・ブレンダだ。

チャイルズは国内のテロ事件をいくつも解決し、情報局内に仕掛けられた爆弾さえも簡単に見つけた。

さらに情報戦や電子機器に精通し、IQが200はあるのではない

かとも言われている。

『 副局長……不審な男2人を発見しまして…… 』

アングスは乾いた声で告げた。

チャイルズはいかしげな表情をしながら受話器を耳に傾けている。

『 特徴と何をやっているかを教えて 』

チャイルズの声は何か人間の内面に響くような恐怖がこもっていた。

『 1人はアジア系の男。もう1人は黒人です 』

アングスの話を聞いたチャイルズは、ある事を思い出した。

朝方からル・メリディアン・ピカデリーで起こっている爆破テロ騒ぎだ。

未だに犯人は見つからず、犯人の映っていたとされる防犯カメラの映像の一部に若いアジア系男性が慌ててホテル前のロンドンタクシーに乗る姿が映っていた。

その事件現場で発見された男性の死体の近くにあった銃には、国内未登録の指紋があったはず……。

チャイルズは渋い顔で考え込み、眼前のパソコンに映るホテル周辺の防犯カメラの映像を見た。

『 ウェストミンスター寺院の床を叩いたりして…… あっ！ 』

『 何？どうしたの？ 』

『奴ら……寺院から出て行きます』

何だと！？早く何とかしなくては……。

チャイルズは苦い顔を見せながら受話器を耳に押し付ける。

『すぐに応援を送る。あなたはその部隊と合流して犯人を追跡して  
ちようだい』

『は……はい……』

通話はチャイルズによって切断され、携帯から寂しげな音が響く。

何だよ……せつかくの休みなのに……。

アングスは後悔感を覚えつつ、携帯をしまった。

\*

ロンドンの街を駆け抜ける巨大なトラック。

荷台には黒いゴミ袋が満載され、中心が大きな衝撃を受けて潰れて  
いた。

破れたゴミ袋からは、白い羽毛が溢れ出ている。

トラックの運転席には、スーツを着た男が1人運転していた。

遠目から見れば、高級なオーダーメイドのスーツを着たビジネススマ  
ンが、ゴミ集積トラックを運転しているなどおかしいと思わざるお  
えない。

『ああ……“ダーウィン・ノート”は見た。奴らは動き始めたか？』

スーツの男は携帯を右耳に押し付けている。

『……よし、追跡を続ける。保安部の連中は邪魔なら始末しろ』

## 動き出す国家（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

## ダウン・アナグラム

イギリスセント州ダウン。

そこに、啓二とマイケルの姿があった。

「ここがダウン・ハウスか……」

啓二の眼前に映り込むレンガ造りの家壁と館。

マイケルの運転するロンドンタクシーから見えたその光景は、絶妙なものだ。

ダウン村はチャールズ・ダーウィンの没地である。

元々ロンドンに住んでいたダーウィンは、子供と妻の為、閑静なダウン村へと移る。

妻であるエマや子供達、さらに多くの使用人達とともに暮らし、死ぬまで研究を続けていた。

心臓に対する病を患い、身動きもままなくなっていたが、それでもダーウィンは研究を止めなかった。

妻や子供、そして使用人達の手伝いを受け、かろうじて動いていたという。

1882年4月19日。

ダーウィンは自宅で死去。ダウン村にあるセントメアリー教会に埋葬されるはずだった。

しかし、多くの人々の呼び掛けにより、ダーウィンはウェストミンスター寺院に埋葬される。

宗教や神、そして旧約聖書を批判したダーウィンがまさかウエストミンスター寺院に埋葬されるとは夢にも思わなかっただろう。

啓二とマイケルは、セントメアリー教会の墓地にいた。

その眼下には、ダーウィンの妻エマの墓がある。

2人のお目当てはこれではなかった。

「ダーウィンが本来入るべき墓。それがここにあるはずだ」

啓二は一点の曇りも無い表情で言った。

ふと、啓二の動きが止まる。

その足元には、ある人物の墓があった。

「……これが“ダーウィンの本当の墓”？」

「そういうこと」

「だが……これは……その……」

マイケルは愕然としながらその墓に刻まれた人物の名前を見つめた。

“パースロー”

思いもよらぬ人物。

マイケルにはそれが誰なのかという知識は無かった。

「……パースローというのはダーウィン家の執事だよ」

執事？知らないな……。

突然知ったダーウィンの執事パースローの存在。その墓が本当にダーウィンの墓なのか？

マイケルは漠然とする光景を傍観していた。

「ダーウィンが入るはずだった墓に……パースローが入ることになった」

啓二は地面にしゃがみ、パースローの墓を見据える。

そして、東の方角へと顔を向けた。

「20歩……進めば全てが分かる」

啓二は立ち上がり、歩幅を確かめながら厳かに歩を進める。

……18、19……20歩。

歩んだその先には、地面に埋まる小さな正四角形の石版があった。

「これが……答え？」

雨風によって一部が侵食されたその石版は、何の変哲も無いものだった。

啓二は石版に右手を置き、探りを入れる。

「……これは」

啓二の右手に違和感が迸る。  
埋められたはずの石版がとても緩く埋められていて簡単に掘り出せ  
たからだ。  
石版を手に取り、全体を確かめる。

\* H s i r b t i r a n y s n t l u o r s t u u m e n  
a \*

石版を裏を向けると、そこには奇妙な文字が書かれていた。  
それを見た啓二とマイケルは思わず顔をしかめた。

「何だこれは？」

マイケルはその文字を凝視する。  
何の意味も無く、規則性の無い言葉。ただそれしか分からなかった。

「意味は無い。ただの言葉遊びだよ」

そんなマイケルの言葉に、啓二はある記憶が蘇った。

「そうか……これは“アナグラム”だよ」  
「アナグラム……なるほど……」

啓二はダーウィン・ノートに挟まれた文書の一枚の空白の部分に言葉を書き入れる。

name……system……違うか……。

アナグラムはその文字を入れ替えることによって生まれる。だが、その答えはなかなか分かりづらい。

「ヒント……何かヒントがあれば……」

啓二は藁にも縋る思いで周りを見渡した。

何か少なくともいいからヒントが欲しい……。という気持ちを抱いて……。

ふと、啓二はあるものの存在に気付いた。

それは、石版が埋まっていた穴。

その底を見てみると、さらに地面深くにもう一つの石版が埋まっていたのだ。

「これは……」

啓二がその石版を見ると、ある建物が刻まれていた。

貴族の屋敷のような大きな建造物だ。

「……なるほど」

啓二はその石版の建物がうる覚えの記憶ではあるが分かった。

ペンは軋みを上げながら単語を白い紙の上に記し、アナグラムを解明していった。

\* b r i s i s h n a t u r a l h i s t o r y m u s e u  
m \*

「大英自然史博物館？」

マイケルは紙に書かれた言葉を見てつぶやいた。  
思った以上に身近な所だな……。

「とにかく行くしかないよ」

啓二は石版を四角形の穴の中に押し戻しながら言った。

## ダウン・アナグラム（後書き）

本当にパースローの墓はありますが、ダーウィンが埋葬されるはずだった墓というのは妄想です。実際には違います。

ご意見。ご感想等お待ちしております。

ロンドン近郊を走る一台のロンドンタクシー。  
その中には、啓二とマイケルが乗っていた。

「本当に自然史博物館に？」

マイケルは疑念を抱きながら言った。

今だにこの壮大な物語の全体図がマイケルには上手く伝わっていない。

実際、何故自分はこうやってロンドン郊外を運転しているのかわからなかった。

「あるはず……なんだ……」

一方の啓二もなんとも腑に落ちなかった。

あの男が死に際に言った言葉が脳裏に焼け付き、囁く。

『ミッシング・ノートを守れ』と……。

マイケルは離している途中。ある音を耳にした。

それは、上から聞こえてきていた。

まるで爆弾が落ちたかのような轟音と爆風がタクシーに伝わっていた。

ロンドン近郊上空。

ウエスト社とアグスタ社による共同開発によって生まれた凡用ヘリ  
『アグスタウエストEH101』が飛行を続けていた。

そのヘリ内には椅子に座り、不機嫌な表情を見せるチャイルズの姿  
があった。

膝の上には黒色のノートパソコンがあり、監視カメラと衛星の写真  
が映っている。

「……奴らのタクシーにはまだ着かないの？」

チャイルズは前方の部下。クレイブに言った。  
燃えるような瞳と大きな皺を浮かべる口元を見て、クレイブは思わ  
ずたじろいた。

「もうすぐ到着するはずです……」

クレイブには何の確証も無かった。

チャイルズの全てを見透かすような瞳から視線を反らし、声帯を震  
わせながら言う。

その光景を見たチャイルズは、ますます不満を覚えた。  
使えない……。最近の人材は……。

チャイルズはクレイブからノートパソコンへと視線を向ける。

高精度の画面には、印象的な黒色のロンドンタクシーが映り、それ  
がダウンに入る所が映されていた。

国家の安全　そして利益こそがチャイルズの最優先事項だ。彼女は障害物をことごとく粉碎し、任務を遂行する。それこそが国の為、そして自分の為になるのだ。

「副局長。見えてきましたよ」

クレイブの声がチャイルズの耳に響く。  
スコットランドヤードも少しは役に立つようね……。

チャイルズは顔を窓に近付け、地上を見据える。  
そこには、レンガ造りの家々が連なった狭い道路を通り抜けるロン  
ドンタクシーの姿があった。

チャイルズは耳元に付けた無線機を使い、仲間との交信を図った。

『地上部隊。こちらチャイルズ』

『……こちら地上部隊』

雑音の混じった捜査官アングスの声がチャイルズの耳に伝わる。

『目標“渡り鳥”は前方100メートル先にいる　道路を封鎖せ  
よ』

チャイルズはへりから響く轟音に負けないような大声で言った。  
アングスはその声を聞き、思わずうなずいた。

『了解……任務を遂行する』

マイケルは轟音の正体が何か分かっていない。

それが、今自分達を捕まえようとしているM I 5の特殊部隊を乗せたヘリだとは夢にも思わなかった。

ハンドルを大きく右に切り、右折する。

「何だ？」

前方に見える一台の黒い車。

それは突然角度を変えて横に停まり、目の前に広がる道路を封鎖した。

「一体何をやってる？」

マイケルは眼前に映る車両に憤慨し、クラクションを鳴らす。

すると、その車から黒いスーツを着た男達が降りてきた。

その手には、拳銃が握られている。

「エンジンを停車し、降りて来い！」

スーツの男達の1人が前方に進み、大声で叫ぶ。

マイケルと啓二は困惑するしかなかった。

タクシーの後方 比較的大きな野原には、重厚なへり。アグスタウエストEH101が着陸する。後方ハッチが軋みを上げて開き、そこから灰色のスーツを着た中年女性が降りてきた。中年女性はアスファルトの道路を軽快な音を響かせながらヒールですたすたと歩く。

「……………」

中年女性は無言で拳銃を取り出すと、何の迷いもなくタクシーのタイヤを撃ち抜く。啓二とマイケルは当惑と恐怖を覚えた。

「…降りてきなさい……………」

運転席の右窓から中年女性が顔を近付けて言った。茶色の美しい長髪と華奢な体格には似合わず、右手に拳銃を持っている。

マイケルは右手に握られた拳銃を見据え、静かにドアを開けた。

「両手を上げて地面に膝を付きなさい」

「分かった！撃たないでくれ」

中年女性は銃口をマイケルに向けながら言った。その言葉通り、マイケルは両手を上げて地面に膝を付いた。

少し遅れて啓二もタクシーから降り、両手を上げて地面に膝を付いた。

## 信用

「あなた方の正体は既に分かっていますよ」

チャイルドは渋い表情で啓二とマイケルに言った。

その言葉は2人の身体を揺さぶるようなものだ。

2人は思わずチャイルズから目を反らし、悪夢から逃れようとした。

「……私は情報局保安部副局長チャイルズ。あなた方が“MI5”の名称で知っている所の副局長です」

チャイルズの言葉に2人は思わず顔を見合った。

まさかとは思っていた2人だったが、自分達が乗せられたこのへりには黒の迷彩服とヘルメットを被る屈強な男達がいる。

そして、彼らは黒光りする銃を腰元に着けているのだ。

この状況はあまりにもおかしく、あまりにも絶望的だ。

啓二はそう心の中でつぶやいた。

2人を乗せたEH101は轟音を上げながらロンドン上空を飛んでいる。

パイロットに告げられた目標地点は『テムズ・ハウス』イギリス情報局保安部の総本部だ。

「ミスター・タケジマ。ル・メリディアン・ピカデリーの一室にあった銃からあなたの指紋が検出されましたよ」

チャイルズは眉を吊り上げた表情を浮かべながら言う。  
それは、チャイルズが得意とする心理的攻撃の一つである。  
犯人を自白させる上では、心理的な攻撃が最も有効的であるからだ。

「あんだ……まさか……」

マイケルは愕然とした顔で啓二を見据えた。  
それを見た啓二は、慌てた様子で誤解を解こうと口を開く。

「違うんだ！それは……」

啓二は今までの一部始終を話し始めた。  
終始無言のまま、マイケルとチャイルズはそれを聞き取った。  
チャイルズは啓二から没収した黒いクリアファイル『ダーウィン・ノート』を凝視していた。

「…その話が本当として……このままでは犯人が危機的問題を起こしかねませんね」

チャイルズは険悪な表情を浮かべながら言った。  
彼女はその話を信じる事にしたのだ。

「あの人に言われたんですよ……守れと……だから守らないと……」

啓二はチャイルズを見据えて言った。

チャイルズは手招きしてクレイブを呼ぶ。

クレイブは当惑の表情を浮かべながら何事かと不安を募らせてチャ

イルズの元に歩み寄った。

「パイロットに目標を“自然史博物館”に変更させるように……」  
チャイルズの言葉に啓二は呆気に取られていた。まさか信じてくれるとは夢にも思わなかったからだ。  
クレイブは何も言わず、静かに頷くと操縦席へと歩みを進めた。

ロンドン自然史博物館。

その従業員用の出入り口には、守衛のケビンが警棒片手に守っていた。

世界において自然系ではトップの座に着くロンドン自然史博物館では、厳重な警備体制が敷かれている。

だが実際、絵画や彫刻のように高値で売り捌く事が難しい自然展示物のみを扱っている為、誰にも狙われる事はほとんど無い。

それこそ、モナリザと同等といえるような警備システムが、虫や魚の標本を守っているのだ。

ケビンは小さなテレビ画面に目を向け、自宅から失敬したスナック菓子をほおばっていた。

大学時代に付いていたはずの筋肉は、贅肉と脂肪に変貌していた。

さらに、最近では自慢だった赤毛の髪が抜け始め、脱毛症に悩まされつつある。

ふと、ケビンの視線にあるものが映りこんだ。  
それは、高そうなスーツを着た中年の男だった。

「失礼、身分証をお持ちでしょうか？」

ケビンは警棒を揺らしながら男の元に近付く。

男は軽蔑の目でケビンを見つめ、上着の胸ポケットをゴソゴソと探り始めた。

気取った成金が……。

男の表情を見たケビンは思わず心の中でつぶやく。

しかし、次の瞬間、その顔から瞬時に表情が消えた。

男の手には、拳銃が握られていた。



信用（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

アーチー

ロンドン自然史博物館裏。

その裏手の開けた大地に、巨大な鉄の塊『アグスタウエストEH101』が降りてきた。

周りにいた通行客は恐怖の念を覚え、逃げ惑った。

「周辺の安全確保！」

黒の迷彩服を着込んだクレイブは、ヘリから降りて叫んだ。

チャイルズは爆風の中を前かがみ姿勢になりながら啓二の手を連れて降り立った。

『地上班？今どこにいるの？』

『自然史博物館が見えてきました。もうすぐ到着します』

チャイルズの耳に付けられた無線機からアンガスの声が響く。

「で…博物館のどこに行けばいいの？」

チャイルズは啓二を見据えて言った。

「いや……それは知らないんですよ」

啓二は少々困りながらも答えた。

その言葉を聞いた途端、チャイルズはいかしげな目を啓二に向けた。

やっぱり使えない……。

自然史博物館従業員用出入口。

守衛の為に用意された四角形の守衛所が置かれていた。

しかし、その守衛所に守衛の姿は無かった。

「どこに行ったの？」

チャイルズは守衛所の中を一瞥する。

その中には、電源の付いた小型テレビと食べかけのスナック菓子袋があった。

啓二は、守衛所の出入り口近くのアスファルトに付いた物体を見ていた。

赤い液体のようなものがアスファルトに染み付いていた。

何だかおかしいな……。

啓二は赤い染みが線のようにどこかへと繋がっていることが分かり、歩みを進める。

その先には、扉があった。

「……チャイルズさん。ここに赤い何かが続いているんですが……」

守衛所を見ていたチャイルズは、啓二の声を聞き取り、駆け寄る。

確かに、そこには赤い何かと扉があった。

「どうして」

チャイルズはドアノブに右手を掛け、それを回した。すると、ドアは軋みを上げて開いた。

赤い線は、中に置かれていたロッカーのようなものに続いている。

「何が……あるの？」

戸惑いの念を覚えながらも、チャイルズは躊躇なくロッカーを開けた。

出てきたのは、大きな男の死体だった。

「……これは急がないとね……」

チャイルズは眼下に横たわる男の死体を見据えて言った。

頭部を銃撃された男の額は、出ていた血が乾いたのか赤く染まっている。

「ミラード、オライリーはここで首都警察と地上部隊を待ちなさい。他の者は着いて来て」

2人の捜査官、ミラードとオライリーは頷き、その場に立ちつくした。

ロンドン自然史博物館ダーウィン・センター。

博物館の所蔵庫の一つで、あのチャールズ・ダーウィンに因んで名付けられている。

主に動物の液体標本や植物の乾燥標本が所蔵され、世界の生物学において多大な貢献をしている。

「アーチャー」だ」

啓二の眼前には、巨大なイカの標本があった。

それは、全長8メートル以上もあるダイオウイカの標本で『アーチャー』という愛称を持っている。

アーチャーは、ホルムアルデヒドと食塩水混合液に満たされた大型のガラスケースに入れられている。

白色がかった巨大な目と脱色した体は、見ているだけで気味が悪い。その為、目を輝かせて見ていた啓二も、思わず目を反らさずにはいられなかった。

「この部屋は不気味だ……」

チャイルズは部屋中に目を向けて言った。

ここは標本室。大量の生物の死体がホルマリンといった薬品で漬けられ、その死体の空ろな瞳はどこを見ているのかよく分からない。

その中で特に不気味なのは、言うまでもなくアーチャーだった。

## アーチー（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

## 扉

啓二達が自然史博物館に到着する10分前。

スーツの男は、標本室のアーチーを見据えていた。

「……でかいイカだな……」

強化ガラスの大型ケースに入ったアーチーを見て、スーツの男は言った。白色がかったアーチーの瞳が、スーツの男を見つめている。その寂しげな瞳と変色した体は、スーツの男でさえ不気味としか言い様が無かった。

スーツの男は、骸と化した博物館職員的首元から奪い取ったカードキーを手に持ち、標本室の奥へと進む。

奥にはカードキー開閉式の装置が付いた扉が聳え、男はカードキーをスラッシュした。

扉は独特な音を響かせ、スーツの男はドアノブを回した。

スーツの男はドアを開けると、そこには一台のエレベーターがあった。

もうすぐ変わる。

男は心の中でつぶやき、黒色の革手袋を付けた両手を見つめた。革手袋は警備員や職員の血で赤く染まり、臭いを放っていた。

全てはアルトーから始まり、博物館の職員達も死に　いや、

天に召されたか……。

信教者であれば、そう言うであろう……。

ダーウィンは、死を神や罰とは関係無く、超自然的な現象だと言った。

現代においても、死は神聖の欠片も無い。いや、欠如したという所だろう。

スーツの男は冷たい空気を胸いっぱい吸い込むと、エレベーターへと足を踏み入れた。

啓二達は立ち往生していた。

ダイオウイカが置かれた部屋にダーウィンの遺した知識など存在するのだろうか？

チャイルズは苛立ちを隠し切れず、周りの部下達に叱咤していた。

「……どこかにヒントがあれば……」

啓二は部屋中を見渡し、ヒントを探した。

ふと、部屋の奥に目をやると、一つの扉を見つけた。

扉の横に『B7-D』というネームプレートが掛けられている。

「これは…確か…あのダウンの……」

それは、啓二とマイケルがダウンの墓地に行った際、アナグラムのヒントとして見つかった自然史博物館の石版に刻まれていた文字だった。

「ここです。確かにここです」

啓二は何の迷いもなく言った。

今はこれに賭けるしかない。

チャイルズはその扉へと歩み寄り、凝視した。

「…カードキー開閉か……」

チャイルズは思わず渋い表情を浮かべた。

この手のシステムは厄介で、映画のようにカードキー装置を銃撃しても開く事は無いだろう……。

「破壊するしか無いわね」

チャイルズは白い粘土のようなものを部下から受け取ると、それを扉の周りに貼り付けた。

それは、一般的に“C4”爆薬で知られるものだ。

爆薬が扉に貼り付けられると、チャイルズは何の迷いもなく起爆装置を作動させた。

引き裂くような爆音が響き渡り、扉は呆気無く倒れる。

それを見た啓二は、近くに貴重な標本がいくつもあるのに何の躊躇も無く爆破したチャイルズに思わず身震いした。

## 扉（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

## 対面

B7-D

そこは、大英自然史博物館が当初に作っていた地下書物庫だ。壁は黄色のレンガと、朽ちた木片が一部壁面から突き出ている。

実際、この地下室は地下3階に相当する場所に位置しているのだが、何故かB7　つまり地下7階で表示されている。それが一体どうしてなのかはよく分かっていないらしい。

防熱・防音対応の次世代用材によって作られた鉄板によって部屋の壁は補強され、書物に最適な環境を作るために冷房が完備されている。

部屋中に巨大な本棚が置かれ、そこに膨大な書物が入れられていた。啓二はその光景をまじまじと眺め、ある本を発見した。

「……これは……“種の起源”の原本か？」

啓二の見つめる先には、特殊なケースに入れられた白い紙があった。それこそが、種の起源の表紙だ。

「よく見つけたな」

突然部屋中に響くおどろおどろしい声。

それを聞いた途端、チャイルズは腰元のホルスターから拳銃を取り出した。

チャイルズの眼は部屋全体を見渡し、レーダーのように動き回って

いる。

「どこだ！一体どこにいる！」

啓二は憤りを覚えながら叫んだ。

あのアルトーの死に際を見た啓二は、ここにいる誰よりも男を憎んでいた。

「ここだよ……」

高そうなスーツを着た男が部屋に置かれた本棚の裏から姿を現した。男の顔には笑みが浮かび、この状況を楽しんでいるかのような。その男の右手には、ある紙が握られている。

「諸君、よく来てくれたな」

男は手振り素振りをしながら、啓二達に言った。

完全に頭がいかれてるな……。

チャイルズは思わず心の中でつぶやいた。

「両手を上げる！」

チャイルズの叫び声が壁や天井に跳ね返り、部屋中に響き渡る。

「…知っているかな？ダーウィンは奴隷制度に反対していた　今にすれば先進的とは思わないか？」

「両手を上げると言っている！」

男は渋い顔でチャイルズを見つめた。  
あの時の“同胞”達の持っていた眼とそっくりだな。

「君達は何も分かっていない……。何故私がすぐに出てきたと思っ  
？」

啓二は男の言った言葉に嫌な予感を覚えた。

確かに、アルトーや警備員を殺害した血の気の多い男がこんな簡単  
に出てくるだろうか？

不意に覚えた気味の悪い恐怖に、啓二は襲われた。

「そこに一人、“裏切り者”がいると言ったらどうだね？」

男がそう言った瞬間、部屋に静寂が生まれた。

その静寂の最中 啓二のすぐ後ろで奇妙な音が響き渡った。

## 対面（後書き）

感想お待ちしております。

## 裏切り者

啓二が後ろを振り返ると、そこにはスコットランドヤード捜査官。クレイブが堂々たる様子で隣にいた仲間の捜査官のこめかみに銃を構えていた。

不敵な笑みを浮かべるクレイブは、恐れ戦く同僚の捜査官を躊躇なく狙っていた。

「クレイブ！貴様……」

チャイルズは気が動転し、狂わんばかりの声で叱咤した。

声は部屋中に反響して、特殊なエコーがかかった状態で啓二の耳に響き渡る。

「副局長殿。無益な殺しは止めましょうよ」

クレイブはそう言いながら、何の躊躇も無く同僚のこめかみ目掛けて銃弾を放った。

笑みを浮かべるクレイブの表情は、まるで悪魔　それ以上に危険な雰囲気漂わせていた。

ロンドン自然史博物館地下書庫『B7-D』

そこは、戦慄の恐怖と無限の憎悪。そして暗黒の力に包まれた。エレベーターで降りてきた仲間の中に、裏切り者クレイブがいたのだ。

床に横たわる捜査官の死体。それは、夥しい量の鮮血が噴出している。

部屋にいるのは啓二、マイケル、チャイルズ。そして謎の男と異常者クレイブ。

重量の関係上、部屋に降りてこられたのは僅か5人だったが、今や正義の側には3人。悪の側には2人がついている事になる。

いずれ、その“正義”が“悪”に逆転するのは目に見えていた。

密室状態にある『B7-D』を、啓二は棺桶の様な状態になりかねないと感じた。

自分の亡骸が冷淡な床に横たわるのは時間の問題だろう。

「こちらの要求……それは“ミッシング・ノート”の在り処を教えてください」

カシミアのグレースーツに身を包んだ男は単調に言った。

「知らない。ミッシング・ノートなんてどこにあるやら……」

「とぼけなくてもいい。君なら見つけられるはずだ」

啓二は、本当にミッシング・ノートの在り処など知らなかった。その存在を知ったのは死に際の際のアルトーが発した言葉からであり、それ以上の事など分かるはずも無い。

「なら探せ。ここで天に召されたく無いだろう?」

男は含み笑いを見せながら言った。

行動を実行に移すしかない。

啓二は胸の内につぶやき、部屋の中を探し回った。数少ない情報と  
ダーウィンに関する知識。

それを脳裏に浮かべながら部屋全体に視線を行き渡らせる。その光  
景はまるで一直線に進んでくる巡航ミサイルを探さんとするレーダ  
ーのようだった。

ふと、部屋の壁の一部に視線が向く。

そこには、ダウン村で見つけたあのアナグラムを解く上で非常に重  
要なヒントとなった『大英自然史博物館の石版』があったのだ。そ  
の形、造型、材質。どれを取っても同じとしか言いようが無い。

周辺の壁が黄色レンガで包まれている中で、この石版は一際視線に  
映りやすかった。

「ここだ。これじゃないかな?」

啓二は不安を募らせながら言った。

男は一瞬渋い顔を見せ、啓二に視線を向けたものの、とりあえずは  
一つのヒントにはなると納得したようだ。

男は石版を触り、その感触を確かめた。

これなら取り去ることが出来るかもしれないな。

「クレイブ、見張っておけよ」

「了解しました。マスター」

クレイブは今までに見せなかつた優しげな声で言った。

それは、きびきびとした口調で話し、行動するいつものクレイグとは真反対だ。

男は石版の隙間の部分に両手を忍び込ませ、思い切つて引つ張つた。すると、石版は音を立てて少しずつ壁から出つ張つていき、ついには完全に取り除かれる。

石版があつた壁の一部には四角形の穴が形成されていた。

「ついに……」

男は期待と希望を胸に覚え、漆黒の続く壁の穴に手を突っ込んだ。その手には、何か硬い箱のようなものが当たるのが感触で分かつた。そして、壁に開いた四角形の穴から四角形の金属製の箱が出てきたのだ。箱には錠が掛けられていなかった。

男が箱を開けると、そこには色あせた一枚の封筒が入っている。

「何？まさか……そんな馬鹿な……」

封筒を見た男の顔はとても険悪なものだった。

一体その封筒は何なんだ？それほどにまで驚くべきものなのか？

啓一は恐怖を感じつつも、純粹な興味心にそそられた。

興味から男の持つ封筒へと顔を覗かせた啓二は、その男同様に愕然した。

そこに書かれていた届け先の相手は、予想を超えた人物だった。

↳ To queen Alexandrina victoriana  
(アレクサンドリナ・ヴィクトリア女王へ)

「ついにこの日が来たな」

男は、瞳を輝かせながら言った。

ついに全てが変わる。

そう 全てがね……。

**裏切り者（後書き）**

ご意見お待ちしております。

## 野望

それは数年前にさかのぼる。

私は世間から『イルミナティ』と称される秘密結社にいた。2008年には、法的組織に認可されたが……。かつて、私はイルミナティの一員として、高階位の地位にいたのだ。

投資ファンドで大儲けした私は、結社に多額の支援金をまかなっていた。

そんな時　私はある男と出会った。

男は言った「ダーウインはもの凄い秘密を隠している」と。

私はそんな男の言葉を最初は信じていなかった。そのみすばらしい容姿と、分からない素性から、信用に欠けていた。

しかし、その考えはすぐ変わった。

その男は有力な証拠を教えてくれたのだ。その証拠こそ、『ダーウイン・ノート』と呼ばれる記録文書の有力な証拠だった。当時、ダーウインとの親交が深かった科学者のごく一部に与えられたというヒント。

それこそが、ダーウイン・ノートだ。

ダーウィン・ノートは時代とともに様々な人間に渡り、滅んできた。時には貴族に。そして、ある時期には独裁者ヒトラーの手にも渡っていたという。

その中で唯一遺されていたのが、アルト一族に受け継がれたダーウィン・ノートだ。

オーク材の古めかしい机が立ち並ぶ書斎室。

そこには、真紅に染まったローブを着込んだ老人達の姿があった。

彼らこそが、数少ないイルミナティの最高幹部達。その厳格な顔立ちと、壮健とした姿勢は実力者たる風貌を強く表していた。最高幹部達は、眼前に立つ1人の男を強い眼力によって見据えている。

その男の名は　クラウス・ダーミツシュ。

この組織の高位階級者である。

「……私の提案を聞いて下さい」

クラウスは厳かに、そして的確に全てを話した。

彼の考えた提案。それはダーウィンの遺した『ミッシング・ノート』を利用して全てを変えようというものだった。クラウスの提案を最高幹部達は何も言わず、静かに聴いていた。

最高幹部達は小声で話し合っていた。  
その表情は 渋く、苦々しいもので 険悪な雰囲気の流れ出していた。

クラウドは困惑の表情を浮かべた。  
何かいけなかったか？ 具体性が悪かったのか？ まずいことにならないければいいが……。

そんな事を考えている中、最高幹部達の答えがまとまりを見せ、  
1 人の老人が立ち上がった。

「クラウド・ダーミッシュ……提案は否定された」

老人の言葉に、クラウドは啞然とした。  
自身の存在全てが否定されたような そんな感覚に襲われた。

クラウドは渋い顔を見せつつ、反論を始める。

「何故です？ 何がいけないのですか？」

「全てがだ。我々は悪の結社という訳ではない。分かるだろう？」

老人は厳かな声色でクラウドに告げた。

「そんな……何故です……私はこの組織を強くしようと……」

クラウドは話す事すらままならなかった。自分の存在意義が何かを深く考え、そして全てが漆黒の闇に飲み込まれるような感触を覚えた。そして、全てを諦め、クラウドは闇の中を歩いていく決心をごく短時間で決めた。

静かにクラウドスは後ろを向き、装飾の施されたドアノブを回し、書斎を後にした。

それ以来　クラウドスは最高幹部達と会う事を止めた。

**野望（後書き）**

ご意見お待ちしております。

## ヴィクトリアへの手紙

クラウドは今 念願の『ミッシング・ノート』を見つめている。  
それは、クラウドにとっても、部下であり 自身の意志に従う従  
者クレイブにとっても、素晴らしい瞬間だった。

色あせた封筒に書かれていたのは、ヴィクトリア女王の名前。啓二  
は多くの謎を感じさせられた。

「ついに……全てが変わるな」

クラウドは瞳を輝かせて、封を開ける。  
そこから出てきたのは、一枚の紙だった。

「親愛なるヴィクトリア女王陛下へ」

私、チャールズ・ロバート・ダーウィンは陛下のように信じるべき  
宗教を持っておりません。

しかし、今日、私はある事を告げたいのです。それは、この世界を  
大きく変えてしまう発見です。

私の“進化論”において重要な焦点となった“パンゲネシス”につ  
いてです。

昨週の実験により、“パンゲネシス”において私が提唱した“ジェ

ミュール”の発見に至りました。

陛下も知る通り“ジェミュール”は進化において非常に重要な役割を果たすのです。

これを応用する事が出来れば、恐らく現代における科学を底上げすることが出来るでしょう。

しかし、私は不安でもあります。そこで、私はこの“ジェミュール”研究文書を隠す事にしました。

その場所は、時計塔の“ルナ”の下です。

この手紙は2つ書きました。1つは陛下に。そしてもう1つは選ばれし者に捧げたいと思っております。

嘘だとは思いますが、これは事実なのです。いずれ、機会があれば直接話したいと思っています。

↳チャールズ・ロバート・ダーウィンより↳

その手紙を、クラウスは笑みを浮かべながら凝視していた。ふと、手紙を折り畳み、クラウスは叫んだ。

「その女を拘束しろ！」

クレイブは頷き、後ろからチャイルズの両手首をきつく握り、拘束した。

「一体何の真似なの!？」

チャイルズは慌てて拘束から抜けようとしたが、クレイブの拘束は予想以上に強固だった。

そんな様子を見たクラウスは、履き慣れた茶色のローファーで音を立てながら進み、チャイルズの眼前へと歩み寄る。

そして、不気味な表情を浮かべながら告げた。

「あなたは我々が無事に逃げる為の人質だよ。上に捜査官共がいるからね」

## ヴィクトリアへの手紙（後書き）

ご意見お待ちしております。

## 脱出

啓二とマイケルは、呆然としながら拘束されたチャイルズを見ていた。

クラウドは笑みを浮かべると、上着のポケットから銃を取り出し、それを2人に向ける。

「ごくろうつ……これで君達の旅は終わりだ」

クラウドは含み笑いをしながら言った。

銃口を見て、2人は後ずさりする。

その先にある壁に背中がぶつかった時、彼らはずいぶん死を覚悟した。

「ククククク……」

啓二の耳に響くクラウドの渋い笑い声。それは心底恐怖を感じさせるものだった。

どうすればいいんだ？

啓二は考えた。そして、辺りを見渡し、この状況を打開できる方法を探した。

自身の後ろには、1つのパッドがあり、温度調整や照明のスイッチがある。

さらに、左先に啓二は希望とも言えるべきものを発見した。

もしかしたら逃げられるかもしれない。そう啓二は確信した。

啓二はとっさに壁パッドの照明スイッチを押し、全ての照明を消し

去った。

「クソ……何をやる気だ？」

クラウスの眼前は漆黒の闇に包まれていた。  
無論、啓二とマイケルの姿も輪郭すら分からない。

「いくぞ！」

啓二はマイケルの右手を掴み、壁を右手でつたいながら部屋の左端を指した。

視覚が完全に奪われた啓二にとって、指から伝わる感触のみが全てだ。

それは、まるで自分が深海に住む目の退化した魚のような感覚だった。

「ここだ」

眼前には、おぼろげながら赤い光が見えた。

その光を頼りに啓二はその場所を右手で触り続けた。

何かの作動音が響く。

啓二は思わず笑みを浮かべた。

それは、成功の音だ。

何かが開く音が聞こえた。

すると、そこに眩い光が漏れ出し、1つの箱部屋が現れる。

それは、大型貨物用エレベーターだ。

漏れ出した光を頼りに、啓二はエレベーター近くにある操作パッドの最上階を押し、ドアが閉まる前にエレベーターへと飛び込んだ。クラウドの持つ銃から放たれた赤いレーザー光線がエレベーターの中へと入ってきていた。

レーザーは少しずつ啓二の方向へと近付いていく。

しかし、レーザーが啓二の体を狙う前に、エレベーターの扉は閉まり、上へと進みだしたのだ。

「もついい……、いくぞ」

クラウドは銃をしまい、閉まり行くエレベーターから漏れる光を頼りに照明スイッチを押しした。

漆黒の闇はすぐさま消え去り、光が生まれる。

拘束されたチャイルズを連れ、クラウドとクレイブは人員輸送用エレベーターに乗り込んだ。

エレベーターは機械音を立てて地上へと進む。  
チャイルズは悲鳴を上げようと考えたものの、意味が無いと止める  
事にした。

捜査員アングスは、同僚達を連れて自然史博物館ダーウィンセンタ  
ーの標本室にいた。

標本室には、ダイオウイカの『アーチャー』が奇怪な姿を見せている。  
だが、そんなアーチャーよりも衝撃的なものが眼前に映りこんだ。

それは、同僚クレイブに拘束され、頭に拳銃を押し当てられた  
チャイルズの姿。

その隣には、見慣れない男の姿があった。

「クレイブ！何をしてるんだ？」

アングスはとつさに銃を取り出し、クレイブに向けた。  
その後ろにいた捜査員達も銃を向けている。

「撃つんじゃないぞ！この女に死んでほしくなかったらな！」

クレイブはチャイルズに銃を向け、叫んだ。

アンガス達は銃を下ろし、逃亡するクレイブと謎の男の背中を呆然と見つめていた。

## 脱出（後書き）

ご意見お待ちしております。

## 追跡

ロンドン自然史博物館ダーウィンセンター階。  
荷物室のエレベーターから、啓二とマイケルが困惑の表情を浮かべて出てきた。

「奴を止めないと……」

啓二は眩き、早走りでも歩み始めた。  
その後ろをマイケルがついて行く。

ダーウィンセンターを駆け抜け、裏駐車場に出ると、爆走する一台の黒い車の姿が映り込む。

「遅かったかもしれないな……」

マイケルは苦い表情を浮かべながら言った。

その車を追うようにして、一人の大柄な男が走っていた。

男は立ち止まり、啓二とマイケルへと視線を向けた。

「おい！君達」

男は2人の元へと駆け寄る。

「私はスコットランドヤードのアンガスだ。君らの事は知ってる。奴らが何処に向かっているか知らないか？」

アングスは顔を赤くしながら言った。

「知ってますよ。ビッグ・ベンです」

「ビッグ・ベンだと？」

啓二は、あの手紙の一部を後ろから顔を覗かせて見ていた。

“時計塔”といえばビッグ・ベン　それが事実とは限らないものの、クラウスがそう考えない訳が無いだろう。

「よし、俺の車に乗れ」

アングスは2人を連れて、自身の乗ってきた車へと急いだ。

クラウスの眼前には、天高く聳え立つビッグ・ベンが映り込んでいた。

その隣には、困惑の表情を浮かべながら上手い具合に他者に気付かれないように拘束されたチャイルズと、その後ろにクレイブがいる。3人はゆっくりと、そして確実にビッグ・ベン内部へと歩を進めた。

ビッグ・ベンは、国会議事堂に付属する時計塔である為、一般観光客が入る事は許されない。

しかし クラウスの知り合いには政府高官が多く ビッグ・ベン到着前に正式な入場許可を手に入れていた。

何食わぬ顔でクラウスはビッグ・ベンに入れた。

それが、多くの人間を殺し、誘拐し、もうすぐ世界を根幹から揺るがす人間だとは誰も思わなかった。

## 追跡（後書き）

感想お待ちしております。

## 歴史の敗者 歴史を学ばず

ルナ……ルナはどこにある？

鬼の形相でクラウドスは必死にビッグ・ベン内部の床を調べていた。

全ては“ルナの下”

クラウドスは、それがビッグ・ベンの地下に隠しているのだと考え、そのヒントとなる“ルナ”……つまり、月の紋章が象徴を探していたのだ。そこにダーウィンの遺した“ミッシング・ノートは眠っている……”。

しかし、両手でビッグ・ベン内部のタイル張りの床を探ったものの、“ルナ”を意味するものは見つからなかった。

「どこにあるんだ!？」

クラウドスは胸の内の悲痛を叫び切った。

その背部では、銃を突きつけられたチャイルズが、哀れみの視線をクラウドスに注いでいた。

彼こそ……歴史上における“敗者”ね。

それはルナの下に眠る……。

啓二は密かに胸の内にジリジリとした何かを感じていた。それはまるで、何かが自分の身体中を這いずり回っているような感触。

「本当にビッグ・ベン……なのか？」

「違うのか？」

横に座っていたマイケルは、ひどく興奮した様子で言った。

「いや……確かビッグ・ベンが建設開始されたのは火災でウエストミンスター宮殿が炎上して……復興の際に合わせて新たに作られたんだよ」

ウエストミンスター宮殿炎上が1834年。

ビッグ・ベン着工は1843年……そして、チャールズ・ダーウィンの死は……。

何かが違う！啓二の頭の中を、過去に大学や自身の探究心から学んできた歴史が駆け巡る。

そして　ロンドンに眠るもう1つの時計塔が浮かび上がった。

まったく違う場所。そこに“時計塔”がある……。

「どこだあああああ！……」

クラウドの精神は崩壊寸前だった。

かつての紳士的な姿は滅び去り、地獄の亡者が如く地を這いずる。

クレイブはその光景を見たものの、今だにクラウドを信じ、チャイルズの拘束を解く事は無い。

「手を上げる！」

不意に響く男の叫び声。

その音源の先には、銃を構える大男 捜査官アングス そして

啓二とマイケルがいた。

床にうち伏せていたクラウドは正気に戻り、立ち上がった。

「そこには“ルナ”は無い」

啓二が放った言葉をクラウドはごく普通に受け止めた。  
そんな事は無い。ただのデマカセだ。

「嘘をつくな……確かにルナは」  
「いや、このビッグ・ベンじゃないんだ。もう一つあるだろ？この街には時計塔が」

クラウドの言葉を遮るようにして、啓二は言った。

「そんな馬鹿な……じゃあルナはここに無い……のか？」

愕然と立ちつくすクラウドに、啓二は静かに頷いた。  
ここには無い。確信は無かったが……恐らくあの場所にあるはずだ。  
啓二は心の中でつぶやいた。

クラウドは外界との繋がりを無くしたかのような感覚に襲われ、呆然とした。  
その隙を突くかのように、部屋へと大量の警官が怒涛の如く雪崩れ込む。

多くの警官が銃口を向ける中、背部にいたクレイブは、油断していた。  
チャイルズはその隙を突き、クレイブの銃を奪い取った。

事件は終息した。

チャイルズが隙を突いて抜き出した後、警官達によってクレイブとクラウドは拘束され、全ては終息したのだ。深き闇は滅び去り、そこには光のみが残った。

だが、全てが終わった訳では無い。  
まだ、1つ疑問に思う事が残っている。

『時計塔のルナの下』

その場所について 啓二はやや不安ではあったものの、ある場所に検討が付いていた。

おそらく 時計塔として ロンドンで二番目に有名な場所だ。

**歴史の敗者 歴史を学ばず（後書き）**

感想お待ちしております。

## 太陽の階段

セント・ポール大聖堂はシティ・オブ・ロンドンと呼ばれる特別区域に位置する大聖堂だ。

そのセント・ポール大聖堂には、一般に日本ではあまり知られていないが、『ビッグ・トム』と呼ばれる時計塔が存在する。

啓二とマイケルはそこにいた。

ある“人物”によって招かれたのだ。

2人を乗せたM15の車は、セント・ポール大聖堂のすぐ前に停車した。

「着いたわよ」

運転していたチャイルズは、後ろを振り返って言った。

「どうもありがとう」

啓二は笑顔で言った。

「いえ、色々ありましたからね。償いの1つだと思って下さい」

チャイルズは含み笑いで言った。

2人は勢いよく車のドアを開け、外へと飛び出した。

その眼上には、白色の美しい時計塔が映りこんでいた。

「お待ちしてありましたよ」

不意に2人の眼前に黒色の法衣を纏った老人が姿を現す。

「あなたが…ウエルズさんですね」

「ええ…そうです。私がこの大聖堂の司祭であり、あなた方をお呼びしたウエルズです」

ウエルズは、皺だらけの右手を啓二に差し出し、啓二はそれに答え  
た。

マイケルもまた、ウエルズの老いた右手に答えた。

セント・ポール大聖堂の内部は、細かい造りと鮮やかな装飾に包ま  
れている。その美しさは、建築家であるクリストファー・レンによ  
って設計、建築された。

ウエルズは2人を連れ、とある部屋へと入った。

その部屋は、一般的に『幾何学の階段』と呼ばれる所である。

建築家でありながら天文学者でもあったレンによって造られた傑作  
の1つであり、螺旋状に上へと連なるその階段は、「美しい」の一  
言につきた。

部屋の上の天窓から差し込む太陽の光を受け、啓二は眩しさから目

を腕で思わず覆ってしまった。

神の眼差しかな。

啓二は心でつぶやき、思わず苦笑いした。

「この下の紋章が見えますかな？」

ウエルズの指が差す床のタイルには、花とも太陽ともとれる謎のシンボルが描かれている。

「太陽……ですか？」

マイケルは恐る恐る言った。

ウエルズは優しい微笑みを浮かべると、静かに頷いた。

「この幾何学の階段……どこに位置するか知っておりますか？」

「え……確か……ビッグ・トム内部ですよね」

啓二は不安げな声色で言った。

「そう……。ここはビッグ・トム内部。そしてこれは太陽。太陽と表裏一体の存在が何か分かりますかな？」

ウエルズの唐突な問いかけに啓二は戸惑いを覚えた。

表裏一体？何の事だ？

「うーん……月……ですかね？」

啓二は戸惑ったものの、答えた。

「正解。それが“答え”だと言っただら？」

啓二はそこで全てが分かった。

眞実はすぐそこにある。そう……『ダーウィン・ノート』はこの部屋  
の地下か何かに隠されている。

「かつて、英国国教会はローマとの分離により、キリスト教と分離  
しました。しかし、その体制は以前のような反科学のカトリック主  
義を継承し、教会は“錬金術”を魔術とみなしたのです」

錬金術？一体何の話だ？

マイケルは当惑の表情を浮かべながら胸の内につぶやいた。

「しかし、教会の中には肯定派はいたのですよ……それが、我々で  
す」

「我々？一体どういうことですか？」

啓二は言った。

「私のように……科学に前向きな聖職者はいるのですよ。そして、  
我々の師達は“ルナ・ソサエティ”と協力し、科学の知識をここに  
隠したのです」

突然ウエルズの口から発せられた言葉。それは“ルナ・ソサエティ”  
チャールズ・ダーウィンの祖父。エラズマス・ダーウィンが創設し  
た科学結社だ。

そのメンバーは十七世紀のイングランドの有名な科学者達であり、  
時にはアメリカ合衆国の祖父。ベンジャミン・フランクリンも会合

に参加したという。

「ここにあるのは『ミッシング・ノート』だけではなく、『ルナ・ソサエティ』の知識も隠されているのです」

ウエルズの話に、啓二は言葉を失った。

## 太陽の階段（後書き）

感想お待ちしております。

## エピソード

ウェルズは天を仰ぎ、啓二の瞳を見据える。  
驚くのも無理はない……。

「どうします？ “知識” をご覧にしますか？」

年老いた老人の優しげな声色は、螺旋状の階段を駆け巡った。

セント・ポール大聖堂を背に啓二とマイケルはとぼとぼと歩いていった。

結局、啓二は見る事を拒んだ。自分には見る資格が無いのだと啓二は言い聞かせた。

「楽しかったですよ。久しぶりにいい経験が出来ましたよ」

マイケルはそう言うと、大聖堂正面に止められたM I 5の車へと乗り込んだ。

啓二はその隣に止められたもう一台の車へと歩み寄り、後部座席のドアを開けた。その車には、ハンドルを握るチャイルズの姿があった。

「じゃあ行きましょうか」

啓二を乗せた車はシティを抜け、テムズ川岸の道路を走っていた。ル・メリディアン・ピカデリーは爆破騒ぎで一時的に閉鎖されており、啓二はチャイルズの計らいで他のホテルへと泊まることになったのだ。

車が轟きを上げながら進んでいると、それは姿を現した。

ビッグ・ベン。

沈む夕日を受けて神々しく輝くビッグ・ベンは、その美しい姿を啓二の目に向けた。

啓二はそれを見て思った。

全てはダーウインの言う通りなのだ。

世界は常に変わっている。それは一種の現存の方法。

唯一生き残るのは、変化できるものである。

チャイルズ・ダーウイン。

その象徴が此処<sup>ビッグ・ベン</sup>なのだ。

ビッグ・ベンは大火に滅んだウェストミンスター宮殿の新たな姿の1つ。  
不死鳥の如く蘇った宮殿の中の象徴であり、力である。

ロンドンの象徴は“力”であり“変化”なのだ。

ダーウィンは知っている。

“変化”それが意味するもの  
その行く末を……。

<完>  
第二章 『死の商人』へと続く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1474/>

---

ダーウィン・ノート

2011年9月12日08時00分発行